

表現運動系における児童の楽しさと恥ずかしさに関する事例的研究

—「恥ずかしさを超える楽しさの境地」に着目して—

別府 美季 (東京学芸大学)

1. 目的

本研究は、表現運動系の単元を通して児童がどのような場面で「楽しさ」と「恥ずかしさ」を感じているのかということを中心に授業観察を行い、恥ずかしさを超えた「境地」を味わう授業とはいかなるものか、それを引き出す要因は何かについて明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

- 1) 対象者：都立小学校4年生の児童33名
- 2) 調査方法：授業参与観察及び表現運動についての質問紙調査
- 3) 分析方法：SPSS24 統計パッケージとExcel2013を使用し、単純集計・ χ^2 検定・t検定を行った。さらに、自由記述で得られた回答を場面ごとに分類し、明らかになったことについての要因を映像と指導案から考察した。

3. 結果と考察

- 1) 単元内での児童の楽しさと恥ずかしさの変容について、楽しさは一定に高い値を示した一方で、恥ずかしさは有意に低下した。また、授業ごとの児童の感じる楽しさと恥ずかしさの相関性に有意差は見られなかった。これらのことから児童は恥ずかしいという感情に関係せずに楽しいという感情を抱いていたことが明らかとなり、対象授業を「境地を迎えた授業」と捉えた。
- 2) 「楽しいと感じたのはどんなときですか。」という自由記述を求める質問の回答から、先行研究をもとに〈表現〉〈達成〉〈仲間〉〈フィードバック〉〈鑑賞〉〈思考〉〈創作〉〈脚光〉〈リズム〉〈その他〉の全10項目に分類した。児童の回答は授業の流れに大きく影響すること、児童は表現運動特有の楽しさを感じて

いることが考察された。

- 3) 「恥ずかしいと感じたのはどんなときですか」に対する自由記述回答から、内容を場面ごとに〈表現〉〈個〉〈準備運動〉〈視線〉〈その他〉の全5項目に分類した。
- 4) ■児童が楽しいと感じた場面と恥ずかしいと感じた場面の回答を合わせた結果、同じ場面で楽しいと感じる児童と恥ずかしいと感じる児童の両者がいたこと、また一人の児童が同じ場面に対して楽しさと恥ずかしさ両方の感情を抱いていたことが明らかになった。

4. 結論

本研究では、表現運動単元の授業参与観察を通して「境地を迎えた授業」といかなるものを検討した。児童の感じる楽しさと恥ずかしさに相関性は見られないこと、一人の恥ずかしさを取り除くことが一人の楽しさを取り除く可能性に繋がること等が示唆された。よって、表現運動系の授業において、教師は学習者の感じる恥ずかしさを阻害要因として取り除くのではなく、楽しさを与えることに重きを置くべきではないかという結論に至った。また、その楽しさは教師の表現の大きさ、豊かな表情、雰囲気づくり、言葉かけ等による影響が非常に大きいものだと推測された。

5. 主な参考文献

- 1) 麻生和江(1988) 表現運動・創作ダンスの学習における恥ずかしさについて、大分大学教育学部研究紀要第10巻第2号, pp331-339
- 2) 高橋健夫(2003) 体育授業を観察評価する, 明和出版, pp20-23, p167
- 3) 上田雅純(2017) 舞踊の起源とジェンダー・バイアス, 体育科教育第65巻第2号, 大修館書店, pp. 58-61